

オリッサ州の農村部および都市部における青年の結婚観

瀧澤透¹・Sucheta Priyabadini²・Santosh Kumar Pradhan³・西村祐子⁴

要 旨

目的: 今日のインド社会に置かれる青年の結婚観などについて、農村と都市を比較した。
対象と方法: 農村青年 10 人と女子大学生 4 人を対象に、結婚観（恋愛婚か見合い婚か）やダウリーについて聞き取りを行った。結果: 農村青年は 10 人中 9 人が見合い婚を考えており、経済的なことなどからダウリーを要求するとした。女子学生も 4 人中 3 人が見合い婚を考えていた。ダウリーは違法だが、男性側の意識が高くなければ要求してくる、といった回答があった。考察: 農村でも学力があれば都市の大学に進学して経済的に成功する道筋があった。一方で女子学生はダウリーのない恋愛婚を選択できても、より失敗しない結婚である伝統的な見合い婚を選ぶのではないかと考えられた。

Key words: インド, ダウリー, 恋愛婚, 見合い婚

I はじめに

1. インドの若者

1) 近代化と若い世代

インドの経済発展は著しく、近年は世界で最も高い経済成長率（7.3%）を見せている（IMF：2018 年 4 月推計）。また、インドの人口増加も注目すべきであり、過去 20 年間で約 1.4 倍も増えている¹⁾。インドの人口ピラミッドは 10 歳代が最も多い紡錘型となっているが²⁾、今後はこの若い世代がインドの近代化を推し進めていくと言えよう。インド社会は大きく変化をしているが、伝統的文化と近代化の狭間にあり、経済発展を直接的に感じている青年層の意識がどのように変わってきているのかを知ることは意義深いことである。

2) 青年の自殺の実態

WHO の推計によると、世界で起こる自殺

は年間約 80 万人とされているが、このうち約 1/3 はインドで起こっているという³⁾。

このインドでは青年層の自殺が多い。インドの警察統計にあたる ADSL（Accidental Deaths & Suicides In India）データによると、2014 年は全年齢で男性 89,129 人、女性 42,521 人の自殺があったが、そのうち 18～29 歳の青年層の自殺は男性 27,343 人、女性 17,527 人であった⁴⁾。これは全年齢に占める割合でみると、男性 30.7%、女性 41.2%となる。

同じく 2014 年の青年層の自殺の原因・動機については、男性が「家族問題」5,541 人、「病気」3,756 人、「男女関係」1,581 人、「結婚問題」1,075 人、「薬物中毒」967 人、「失業」838 人などの順であり、また女性は「家族問題」4,221 人、「結婚問題」2,934 人、「病気」2,299 人、「男女関係」985 人、「試験の失敗」407 人、「近親者の死」126 人などであった（「その他」「不明」を除く）⁴⁾。男女とも圧倒的に「家族問題」が多い。「男女関係」

¹⁾ 八戸学院大学健康医療学部 教授

²⁾ KIIT 大学 教授

³⁾ KIIT 大学 大学院博士課程

⁴⁾ 駒澤大学総合教育研究部 教授

「結婚問題」より、カースト制度など文化的背景要因が関係しているものと推察される。特に女性の「結婚問題」では、内訳として「持参金(ダウリー)」が1,707人と多いことに注目したい。このダウリー(Dowry)とは、婚姻において、女性側の家から、女性本人ないし婚家側へ贈られる持参財・金のことであり⁵⁾、時々トラブルの元となる習慣である。

日本でも戦後、価値観の転換など社会変化を背景に、「厭世」などを理由とした青年層の睡眠薬自殺が昭和33(1958)年をピークに増えて大きな問題となった⁶⁾。経済発展が進むインドでは、青年層の自殺問題は注目されるべき状況にあると言える。とはいえ、圧倒的多数の若者は自殺とは無縁な人生を送り、様々なストレスを抱えながら日々の生活を送っている。今日のインドの青年は、まさに時代変化の中心的な世代を形成しているが、そういった中、自殺の要因ともなるような就職や結婚といったライフイベントについて、どのように考えているのかを知ることが興味深いことである。

2. 農村部と都市部での調査

1) 目的

筆頭筆者はインドのオリッサ州にあるダムダムグンダプールという農村地域で、青年男性にインタビューをする機会があった。また、同じ州のブバネーシュワル市にある大学において、女子学生にインタビューを行うことができた。これら異なる背景をもつ若者の結婚観や将来イメージを知ること、インドの青年層の現実を、複数の視点より把握することが可能となった。

本報告は都市から離れた地域に住む農村青年と、都市に住む同世代の女子大学生を対象に、就職や経済、結婚観や将来像といった同じような設問によるインタビューを通じ、今日のインド社会に置かれる青年の状況を明らかにしつつ、農村部と都市部を比較すること

で今日的な課題を検討することを目的とする。また、直接の調査目的とはなっていないが、女性の社会進出など社会が変化する中での結婚方法やダウリーについての意識についてインタビューすることで、青年の自殺に多い原因動機の背景について情報を集めることを念頭に入れた。

2) 調査地域について

オリッサ州はインド東部のベンガル湾に面しており人口は約4,372万人である。農業就業率は75%とインド全体の58.2%に比べ高い。またインドでは貧困地域と位置付けられており、2011~12年の貧困率は32.5%で28州中23位(ワースト6位)であった⁷⁾。このオリッサ州の州都はブバネーシュワル市であり、人口約90万人の都市である。州政府機関や大学などが集まり、一方で中世のインド寺院が多く残っている。

調査を行ったダムダムグンダプール(Dandamukundapur)は、ブバネーシュワル市と聖地として知られるベンガル湾沿いにあるプリー市(人口約20万人)を結ぶ幹線道路(National Highway 316)のちょうど中間にあり、ブバネーシュワル市から約30km南に位置する農村地域である。人口は6,541人、また世帯数は1,407世帯(2011年センサス)となっている⁸⁾。筆頭筆者はこのダムダムグンダプールのパート6というエリアを訪問した。

なお、本稿では訪問した場所を、現地の地名であるダムダムグンダプールと呼びこれを「農村地域」「農村部」としているが、正しくはオリッサ州プリー県ピピリーブロックにあるグラーム・パンチャーヤット(Gram Panchayat: 村落自治体)である。この村落自治体は村(village)とも少し異なり、構造としてはダムダムグンダプール・グラーム・パンチャーヤットの中に、さらにいくつかの村が内在している。

また女子大学生のインタビューは、ブバネ

ーシュワル市北部に位置するパティアという地域にある KIIT 大学 (Kalinga Institute Industry & Technology) で実施した。KIIT 大学は学生が 27,000 人以上在籍する私立大学で、医学、歯学、看護学、工学、情報科学、生物、経営、法律、言語、メディア、ファッションなどの学部を擁している。インド東部を中心に広範な地域から、比較的裕福な家庭の子息が進学している。

Ⅱ. 対象と方法

1. 農村部調査

調査対象はダムダムグンダプールに住む 17～23 歳の独身男性 10 人である。調査日時は 2018 年 1 月 12 日 (金) の午前 10～11 時で、また調査場所は村内にある公共的な空間であった。調査方法は簡易なフォーカスインタビューの形式をとり、筆頭筆者の英語による質問は、共同研究者としてサポートしてくれた、KIIT 大学大学院博士課程の大学院生が現地語 (オリヤー語) に翻訳してくれた。なお、対象となる青年への呼び掛けやインタビューの承諾、場所の確保などもすべてこの大学院生が調整をしてくれたが、この大学院生がダムダムグンダプール出身であったことがこれらを可能とした。

2. 都市部調査

調査対象は KIIT 大学に通う女子学生 4 人である。調査日時は 2017 年 3 月 7 日 (火) の午前 10～12 時で、調査場所は KIIT 大学内にある学生ホール (現地では SAC: Student Activity Center と呼称) であった。調査方法は 1 対 1 による半構造化面接法の形式をとり、事前に準備をしていた設問に英語で答えてもらった。面接場所として一部屋を準備してもらい、1 人に対して 20～30 分程度かけて順番に行った。また許可を得て IC レコーダーで録音した。

なお、対象となる学生は学生部長である

Suchata Priyabдини 教授にあらかじめ依頼をしておき、インタビューの承諾をとっておいてもらっていた。このコーディネートをした教授も含め、女子学生には質問概要を事前に一切伝えていない。また学生はランダムに集められている。

3. 質問内容

農村部では、現在の職業、結婚観のほか、飲酒状況やオートバイ所有について質問をした。また女子大学生のインタビューは、主に卒業後のキャリアイメージや結婚観などであった。

両地域で共通して実施した質問に「ダウリーについて」があった。結婚については、「見合い婚 (Arranged Marriage)」か「恋愛婚 (Love Marriage)」か? といった質問をした。

Ⅲ. 結果

1. 農村部

1) 対象者の背景

インタビューに応じてくれた 10 人の青年の職業は、農業が 5 人、商人が 2 人、大学生 1 人、高校生 2 人であった (図 1)。農業従事者のうち 1 人はマッシュルームの生産も同時に行っていた。商人のうちの 1 人は、そのマッシュルームをブバネーシュワル市内で販売しており、もう一人は小さなグロッサリー (食品や日用品) を扱う小商人であった。大学生はブバネーシュワル市内にある州立ユトカル (Utkal) 大学に通学しており、高校生の 2 人は 3 km ほど離れた隣村にある小さな高校に通っていた。

10 人中 9 人は経済的な状況は厳しく、農業への従事についても学校を卒業した段階で定職に就けなかったためであった。友人が生産する地元のマッシュルームを都市で販売する商人は、比較的豊かな収入があるようで、周囲からは「利口なヤツだ」などと笑いを交えて評価されていた。



図1 農村部の調査風景

なお、この農村の青年は経済的に豊かでないものの、「オートバイを持っていますか？」の質問では、全員が「はい」と答えていた。

2) 結婚について

「あなたの将来の結婚についてですが、恋愛婚 (Love Marriage) ですか？ それとも見合い婚 (Arranged Marriage) ですか？」の質問では、9 人が「見合い婚」と回答をした。恋愛婚を考えている者は1人であったが、この青年はマッシュルーム販売で収入の豊かな若者であった。

結婚に関する話題の中では、「男女比がそもそも異なり、結婚は簡単ではない」との意見があった。彼らの説明では、「ブバネーシュワル周辺の男女比は、男性：女性=1000：751であり、圧倒的に女性が少ない」と言っていた。

3) ダウリーについて

「あなたは結婚した場合、ダウリーを求めますか？」の質問では10人中9人が「はい」と答えた。「いいえ」と答えたのは、やはりマッシュルーム販売をしている豊かな若者であった。ダウリーを求める理由についていろ

ろと意見が出たが、「結婚式など結婚に際して莫大な費用がかかる」ということと、「姉や妹がいるため、息子である自分がダウリーを要求しなければならない」という理由が印象的であった。通訳で入っていた大学院生は「彼らはダウリーを要求しなければならない」、「低い教育が低い収入となり、高額なダウリーを求めることになる」などと補足をしてくれた。

4) その他

「あなたはインドの伝統的な慣習などは、ストレスに感じますか？」の質問では、全員が「いいえ」と答えた。また、「飲酒をしていますか？」の質問では4人が恥ずかしそうに手を挙げていた。酒類販売はオリッサ州では合法であるが、伝統社会では反社会的行為とみなされている。

2. 都市部

1) 対象者の背景

インタビューに協力してくれた4人の女子学生 (学生A、学生B、学生C、学生Dとする) の年齢は、順番に20歳、20歳、20歳、

表1 女子学生の状況

	年齢	出身	卒業後・将来	結婚方法	ダウリーについて
学生 A	20	オリッサ州	行政職	見合い婚	違法である
学生 B	20	西ベンガル州	MBA 取得後、国外で就職	見合い-恋愛婚	恋愛婚には不要
学生 C	20	西ベンガル州	MBA 取得後、地元で就職	見合い婚	恋愛婚には不要
学生 D	24	ジャールカンド州	大学院進学後、病院勤務か開業	恋愛婚	男性側の意識が低ければ要求

24 歳であった。出身は学生 A がブバネーシュワル市内、学生 B と学生 C が西ベンガル州のコルカタ市、学生 D がジャールカンド州であった。所属学部は順に、経営学部&法学部 (Dual Degree Program)、工学部、工学部、歯学部であった。これら属性のほか、進路や結婚観、ダウリーについての回答は表 1 にまとめた (表 1)。

2) 卒業後の進路

学生 A は大学在籍中の 5 年間で 2 つの学位取得を目指している。「卒業後は、インド国内で住民サービスを行う行政職 = UPSC (Union Public Service Commission) に従事したい」と言う。「私たちは早い段階での結婚を望まない。それはキャリアを妨害するからだ (We don't want early marriages. That is sabotaging our career)」と話してくれたのが印象的だった。

学生 B は大卒後、オーストラリアで MBA の取得を目指しており、就職もインド国外を検討していた。社会は確実に変化していると、「私たちは卒業レベルにあるが、この社会変革は 10 年ほど前から既に始まっていると考えている」と説明してくれた。学生 C も大卒後、オーストラリアで MBA の取得を考えているが、就職は、故郷のコルカタ市に戻ると言っている。

学生 D は歯学部を卒業後、インド国内の大学院修士課程への進学を考えていた。「修士課程に進学をしたほうがより多くの知識が獲得でき、そしてより良い医療が患者さんに提供

できる」と説明した。大学院修了後は「病院で勤務もしくは開業となる」と話していた。

3) 結婚観

学生 A は、「恋愛婚は今日的な傾向である (Love Marriage is now the trend)」としながらも、自分自身は「両親が希望する見合い婚 (Arranged Marriage)」をするという。また、「インドでは女性は結婚をする必要があり、結婚後には仕事を辞めなければならない。しかし、これは私たちの新しい世代が望むものではない (women need to get married and women have to drop their jobs after marriage. This our new generation does not want.)」とし、自身の職業観やキャリアイメージを含めて、今日的なインド女性の結婚について意見を述べてくれた。

学生 B は、自分の結婚については「見合い - 恋愛婚 (Love and Arranged Marriage)」を考えていると言う。「見合い - 恋愛婚」とは、見合い相手と一定期間、お付き合いをしたのちに結婚をする方法である。学生 B は「きっと両親が、この方法を許してくれるだろうと思う」と補足してくれた。

学生 C は「見合い婚」を考えている。「私の両親が好きであるかどうかを知る必要があるから (I need to know my parents to like or not their)」と説明していた。ただ、オーストラリアの大学院か就職先の企業などで出会った男性と結婚をするかもしれないとも言い、「もし、その男性がインド人であれば」と条件を付けていた。

学生 D は「恋愛婚」をすると言い、その相手は KIIT 大学で出会った現在のボーイフレンドだという。その彼氏は 2 年前に工学部を卒業し、現在は遠距離恋愛となっている。なお、KIIT 大学キャンパス内では多くのカップルを見かけるため、学生の恋愛は結婚に発展するのかと質問すると「卒業後、カップルが継続することはほとんどない」と言う。

また、「恋愛婚」については、「今日、両親は自分の子供が（配偶者を）選ぶことを、より一層受け入れています。子どもが進路選択であるかのように（Nowadays parents are becoming more accepting of what their children have chosen. Like be it career, be it their love interest, be it anything; parents are becoming more accepting）」と、時代変化の一端を説明してくれた。

4) ダウリーについて

学生 A は「ダウリーは違法だ」と答えていた。学生 B も強く否定した。また、恋愛婚とダウリーの関係についても説明してくれた。

「恋愛婚にはダウリーが発生しない」とし、また「恋愛婚は見合い婚に比べ費用効率が高いが、しかし、それを理由にして恋愛婚に進むとは思わない（Yes, it is cost efficient but I don't think people think it's that economical just to go for a love marriage.）」と話した。学生 C とは、あまりダウリーに関する話にならなかったが、インタビュアーが「恋愛婚にはダウリーが発生しますか？」の質問には「いいえ」と答えた。

学生 D もダウリーについては強く否定をした。そして「今日では、女性側の家族の社会的地位のようなものになっている（So now it has become more like a social status for the girl's family.）」と話した。その理由は「たとえ男性側の家族がダウリーを要求しないとしても、娘の両親は自分自身から、ダウリーを彼らの新郎の家族に与えたり、結婚費用の大部分を支払ったりします。彼らが求めるか

らではなく、もしそうでなければ他の人々がそれについて“うわさをする”からです（So even if the boy's family doesn't demand a Dowry, the daughter's parents from their own they sometimes give Dowry to their groom's family or they spend most of the wedding expenses.）」と説明した。

また、「恋愛婚でダウリーがなくなるか？」の質問では、「私はそうは思わない。男性側が高い精神性を持たなければ依然としてダウリーを要求してくるだろう（I don't think so because in many marriages even if the marriage is a love if the groom's family doesn't have a high mentality they might still ask for Dowry.）」とした。さらに「インドには多くのカースト、多くの習慣がある。私の彼氏はアッサム州の出身だが、アッサム州にはダウリーの習慣がない」と付け加えた。

IV. 考察

1. 社会変化との結婚観

1991 年に始まった経済開放政策以降、インドは着実に発展をしており、物質的な豊かさも相当なものとなっている。自動車やオートバイなどは TV の CM でもよく宣伝されており、庶民の消費欲を掻き立てている。一方で、自殺数も増加しており、男女とも 15～29 歳の青年層の自殺が多く、特に青年女性は深刻である⁹⁾。

筆者らは主に結婚観や持参金（ダウリー）に関して、ダイナミックに社会が変動しているインド青年を対象にインタビューを行った。着目した理由は、ダウリーによる青年女性の自殺が多いこと¹⁰⁾、消費社会の進展によりダウリー要求額も増加していることなどが念頭にあった。

インタビューは非常に簡単なものであり、対象となった人数も極めて少ない。また、結婚など将来に関する問いかけも表面的なものであり、カーストなど若者個々がおかれてい

るコミュニティの背景について質問調査を行っていない。またストレスや自殺といった用語も一切、用いていない。したがって調査で得られた内容は、インドのほんの一断面に過ぎず、また、今日の自殺問題と直接に結び付けられるものでもない。

2. 女性の結婚観

1) 先行研究との検討

インド社会の結婚観に関する調査は、都市部では、樋口によるムンバイ市の事例を詳細に報告したもの¹¹⁾や、西村による高学歴でIT関連企業に従事する女性103名の調査¹²⁾など多くの先行研究がある。また、ダウリーに関する詳細な論考も少なくない¹³⁻¹⁵⁾。本研究は、これら先行研究と踏まえつつダウリーと恋愛婚について検討を行った。

筆頭筆者は、今日のインドにおいて、都市部の高学歴女性が経済力を得て、自由恋愛による結婚を選択しつつある状況より、「世代間葛藤を抱えながらも社会的自立をする女子学生自身の結婚観に、すなわち、ダウリーが関係しないような結婚の選択に、自殺保護因子となるものがあるのではないか」と考えた。

しかし、女子学生のインタビュー結果では、経済力の獲得が予想されても必ずしも恋愛婚を選択しなかった。またダウリーを否定しながらも、コミュニティからのプレッシャーによる新婦側からの支払いや、「高い精神性」がない新郎側からの要求など回答があった。さらにダウリーがないから恋愛婚を選択するというわけではない、との説明もあった。この結果は西村による先行研究と一致しており¹²⁾、学歴や経済力があっても恋愛婚を選択せず、ダウリーは社会悪と否定しながらも存在している現状を黙認していた。

2) 女子学生が見合い婚を選ぶ背景

インドでは見合い婚と恋愛婚の長所と短所について次のように指摘されている¹⁶⁾。見合い婚は親や親族が婚姻相手を見つける伝統的

な方法であることから、家族・親族どうしを結びつけ、周囲からのサポートも得やすい。逆に、見合い婚は当事者がお互いをほとんど知らない状況で結婚しなければならないし、周囲の人間関係の煩わしさもある。さらにダウリーの問題や児童婚の問題も生じる場合がある。一方で恋愛婚は、自分達の愛情や決意に従うことができる。またダウリーも発生しない。しかし、孤立するためサポートも得にくいし、さらには同じカーストどうしの結婚でない場合は問題が生じやすい。

また、コロンビア大学経営大学院のシーナ・アイエンガーはインドにおける見合い婚と恋愛婚について次のように紹介している¹⁷⁾。

現在もなお75%以上のインド人は、恋愛婚の方法があることを知っていても、なんらかの形で見合い結婚を選んでいる。この2種類の結婚に違いがあります。離婚率です。

インドの離婚率は、恋愛婚の場合およそ50%、見合い婚の場合は5~7%となっている

さらに同氏は著書「選択の科学」でも、グプタとシングの研究(Gupta & Shingh, 1982)を紹介しながら恋愛婚と見合い婚(取り決め婚)について論じている¹⁸⁾。グプタとシングの研究は、恋愛婚は結婚期間が長くなるにつれて恋愛尺度得点が低下したが、取り決め婚では結婚したては得点が高くなかったが、期間が長くなるにつれて感情が高まり得点が上がったというものであった。これについては「つまり、恋愛結婚は熱く始まるが冷めていき、取り決め婚は冷たく始まるが温かくなる。」と端的にまとめ、さらには

取り決め婚では、ちょうどルームメートや仕事仲間や親しい友人の間にきずなが

生まれるように、時間がたつにつれて互いのことが好きになるだろうという前提のもとに、共通の価値観や目標を持った二人が引き合わされる。これに対して、恋愛結婚の基になるのは、何といっても愛情だ。(中略)、20年連れ添った時点で、夫婦の9割が、当初感じていた情熱を失ってしまう。(シーナ・アイエンガー 2010 : 69)

つまり、恋愛婚にはリスクがあるため女子学生は選択を躊躇し、伝統や慣習による見合い婚による周囲の人間関係を含めた安定した婚姻生活を選択するのだろう。そして、見合い婚によって得られるメリットが、見合い婚のもたらす脅威やデメリット(ダウリーの発生やダウリーの過剰な要求)よりも大きいことが見合い婚を選択させる要因なのではと思われる。女子学生が見合い婚を選択する背景には、見合い婚が恋愛婚よりも失敗しない婚姻生活を送れることを知っているのかもしれない。

3. 若者の姿—都市と農村をつなぐもの

今回の調査より、農村男性と女子学生は極めて対比的な姿が明らかとなった。農村男性は、就労先がなく経済的に困難を抱え、ダウリーを受け取るしかなかった。女子学生は強く社会進出をイメージし、自己のキャリア形成と婚期を考えながらも、両親との関係で見合い婚を選択し、あるいは恋愛婚も選択肢に入れている。

インドでは、大学進学は非常に厳しい競争となっている¹⁹⁻²⁰⁾。女子学生は皆、非常に流暢な英語を話したが、農村男性で英語がしゃべり話せる者は大学生だけであった。

オリッサ州はインド国内でも豊かとは言えず、ダムダムグンダプールもその限りではない。この地域は弱電化地域であり、家庭訪問をした際に見た住居内の家電製品の所有状況

も乏しかった。また、後日での確認となったが、インタビューに応じた若者のスマートフォン所有率は40%であった。

この豊かでない農村から、若者が経済的な問題を解決し世に出るには、2つあると考えた。1つ目は、近郊農業を土台としたマッシュルームを販売する商人のような才覚である。

そして2つ目は「学力」である。ダムダムグンダプール村は州都の近くにあることから、地理的には比較的恵まれている環境にある。州都ブバネーシュワルには複数の大学があり、オートバイで1時間足らずで通学できる。コーディネートを担当した共同研究者の出身大学は州立ユトカル大学であったが、ブバネーシュワル市内の大学非常勤講師をしながらKIIT 大学博士課程で学んでいた。さらに訪問調査の後の今日では政府機関で勤務をしている。

つまり農村男性であっても、商売が上手であれば、もしくは学力があり大学に進学できれば、経済的な問題も解決でき、高額なダウリーを要求しなくても済むということだ。農村青年であってもインタビューに応じたKIIT 大学の女子学生と同じような将来像をもつことが可能と考えた。

最後に農村青年の説明にあった男女比であるが、男性：女性=1000：751という数値には疑問がある。インド全域に見られる男女比の不均衡は、一部ではあるが女兒が生まれると判った場合、もしくは女兒が生まれた場合、なんらかの方法で生き延びないようにしてしまう悪慣習が背景にある。ただ、この性比については、2011年センサスによれば、オリッサ州の農村部では1000：946(0~6歳)であり²¹⁾、多少の誇張があると思われた。

V. おわりに

農村部と都市部、また男性と女性を対比させた本研究では、結婚の際の持参金(ダウリー)についての考え方が大きく異なっていた。

一方で、都市部の女子学生が必ずしも恋愛婚を選択せず、結婚観については両親の意向を尊重していた。

海外での MBA 取得や歯科医院開業といった将来像を描ける学生と、地元の農村での生活を送る青年の格差は極めて大きい。しかし、サポートをしてくれた大学院生の姿などを見ると、学力によって経済的な格差が生じている構造も否定できない調査となった。次回、もし調査の機会があれば、今度は州立大学に在籍する女子学生のインタビューを行い、

KIIT 大学と同様の質問を行ったあと、自分の故郷が農村であったかどうか、また勉学にどれだけ励んだかについて質問をしてみたい。

謝辞

インタビューに応じてくれた 14 人のインド青年に心より感謝申し上げます。本研究は八戸学院大学イノベーションプログラム（基金）研究等補助金（2016-17）により実施した。

文 献

- 1) OECD Stat. Population (hist5) All ages. Retrieved from http://stats.oecd.org/Index.aspx?DatasetCode=POP_FIVE_HIST (平成 30 年 9 月 30 日閲覧可能)
- 2) 国連人口基金. 世界人口白書 2014 (日本語版).
- 3) World Health Organization. Preventing suicide: A global imperative. 2014.
- 4) National Crime Records Bureau : ACCIDENTAL DEATHS&SUICIDES IN INDIA 2014. Ministry of Home Affairs Government of India.
- 5) 辛島昇ほか監修. 新版南アジアを知る辞典. 平凡社, 2012
- 6) 瀧澤透, 反町吉秀. 日本における 1950-60 年代の催眠剤による自殺とアクセス制限の関連 (第 1 報) —これまでの研究と実際のアクセス制限. 日本セーフティプロモーション学会, 11 (1), 26-30, 2018.
- 7) Government of India Planning Commission : Press Note on Poverty Estimates, 2011-12. 2013.
- 8) Government of India Ministry of Home Affairs : 2011 Census Data, C.D. Block Wise Primary Census Abstract Data(PCA) – ODISHA. http://censusindia.gov.in/pca/cdb_pca_census/Houselisting-housing-OR.html (平成 30 年 9 月 30 日閲覧可能)
- 9) 瀧澤透, 辻田那月. インドにおける青年期の自殺死亡 : 国家犯罪統計局の警察統計を用いた分析. 八戸学院大学紀要, 53, 23-30, 2016.
- 10) 瀧澤透, Agniwesh, Manoj Kumar Jena ほか. インド東部オリッサ州における自殺死亡 —SCB 医科大学の法医鑑定記録より—. 自殺予防と危機介入, 36(3), 62-68, 2016
- 11) 樋口里華. なぜ、その人と結婚するのか : インド都市部における配偶者選択の変化. 九州国際大学国際関係学論集 7(2), 27-50, 2012.
- 12) 西村祐子. 南インドチェンナイ市における女性の結婚観と家族関係の変貌 : アンケート調査より. 駒澤大学外国語部研究紀要 35, 135-161, 2006
- 13) 西村祐子. インドにおける「ダウリ禍」考 : 婚姻法・財産権およびカースト内婚の視点から. 駒澤大学外国語部研究紀要 34(1), 387-409, 2005
- 14) 石橋あゆみ. 南インドにおける婚姻とダウリに関する研究. 蒼翠 : 筑紫女学園大学

- アジア文化学科紀要. 12, 23-40, 2011.
- 15) 小林磨理恵. インドにおける「結婚持参金(ダウリー)問題」の諸相. *Quadrante: クアドランテ: 四分儀*.14,159-173,2012
- 16) Quora:What are the pros and cons of love marriage and arranged marriage?
<https://www.quora.com/What-are-the-pros-and-cons-of-love-marriage-and-arranged-marriage> (平成 30 年 9 月 30 日閲覧可能)
- 17) シーナ アイエンガー. (2012)『NHK DVD コロンビア白熱教室 1』[DVD], 東京: NHK エンタープライズ.
- 18) シーナ アイエンガー著,櫻井祐子訳. 選択の科学. 68-72,文芸春秋,2010.
- 19) インドの教育制度
<https://www.transdiscoveries.com/indian-education-sys.html> (平成 30 年 9 月 30 日閲覧可能)
- 20) 辻田祐子. インドの義務教育における公的部門と私的部門. 佐藤創編「インドの公的サービスに関する中間成果報告書」調査研究報告書 第 3 章. アジア経済研究所,2015
- 21) CensusInfo India 2011
http://www.dataforall.org/dashboard/censusinfoindia_pca/ (平成 30 年 9 月 30 日閲覧可能)